

病虫害発生予察情報

令和7年8月29日

病虫害発生予察情報（飛騨地域） 9月予報

高温多湿の傾向は今後も続くと予測されています。台風が多発が予想され、一方で秋雨前線による気温低下、湿度の高止まり等、気象変動が大きい月です。

ほ場の衛生管理と適期作業・適期防除に心がけ、病虫害の発生を最小限に抑えましょう。

【水 稲】 「たかやまもち」等の早生品種では収穫期を迎えます。収穫が遅い「コシヒカリ」等に、いもち病やウンカ類の防除を実施する場合は、農薬の収穫前日数等の使用基準を確認し、早生品種ほ場への飛散防止に努めましょう。

【果 樹】 気温が高いとカメムシ類やシンクイムシ類の発生が長引く可能性があります。発生状況を確認して必要な防除を実施しましょう。

【野 菜】 気温が低下するとハウレンソウではケナガコナダニやべと病、トマトでは灰色かび病や疫病の発生・急増が予想されます。予防防除に努めましょう。

○主な病虫害の発生状況及び今後の予測（9月） ↓ 防除時期の目安

病虫害名 発生量	発生消長の一例・防除時期の目安									防除上の注意事項等		
	9月						10月					
	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	1半旬	2半旬	3半旬			
水 稲	穂いもち	たかやまもち収穫									<ul style="list-style-type: none"> ・籾いもち(籾単位で白化)が多い場合は被害拡大を防ぐため、追加防除を実施する。 ・晩生品種を追加防除する場合は、収穫時期を迎える早生品種ほ場への農薬の飛散防止に努める。 	
	発生量:多	コシヒカリ収穫										
	ウンカ類	多発時のみ防除										
果 樹	発生量:やや少	本田での発生量									<ul style="list-style-type: none"> ・飛騨地域の発生種は、通常年はセジロウンカのみだが坪枯れを惹き起こすトビイロウンカの侵入もまれにある。 ・昨年は局地的にセジロウンカの大発生によるすす病の発生が見られた。 	
	果樹カメムシ類	予察灯への誘殺数										<ul style="list-style-type: none"> ・本年のカメムシの発生量は平年の4倍以上と多いので、大量飛来時を逃さず防除する。 ・近年は温暖化により、9月中旬を過ぎても発生が多いことがあるので注意する。
	発生量:多	フェロモントラップへの誘殺数										
	シンクイムシ類	フェロモントラップへの誘殺数										
野 菜 全 般	リンゴ斑点落葉病	感染リスク									<ul style="list-style-type: none"> ・春から秋まで長期にわたり発生する病気である。 ・最終防除適期は9月上旬頃である。褐斑病等、他の病害防除と合わせて実施する。 ・次年の伝染源となる被害落葉・被害新梢を少なくする。 	
	発生量:並	フェロモントラップへの誘殺数										
野 菜 全 般	タバコガ類	フェロモントラップへの誘殺数									<ul style="list-style-type: none"> ・9月の飛来が最も多い。ネット等による予防防除につとめる。 ・生長点付近等に産卵するため、幼虫は確認しやすい。 ・幼虫を見つけたら若齢期に薬剤防除を行う。 	
	発生量:多	フェロモントラップへの誘殺数										
	ハスモンヨトウ	フェロモントラップへの誘殺数									<ul style="list-style-type: none"> ・発生の最盛期は9月末から10月始めである。 ・昨年は10月末に発生が半旬別で過去最高の918頭となった。 	
	発生量:並	フェロモントラップへの誘殺数										
野 菜 全 般	アブラムシ類	黄色水盤への誘殺数									<ul style="list-style-type: none"> ・低温になるにつれ発生は減るが、9月前半までは多い。 ・作物定植時の粒剤散布により1か月程度は抑制できる。 ・その後は、発生を確認したら防除を実施する。 	
	発生量:やや少	黄色水盤への誘殺数										

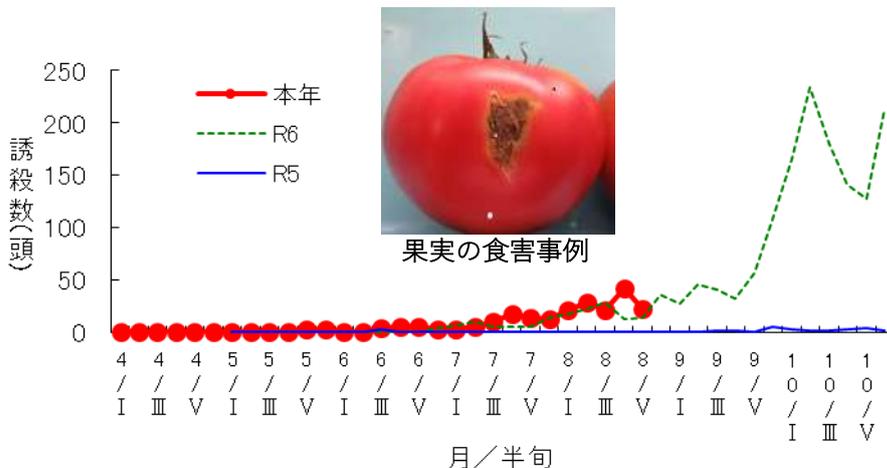
病害虫名 発生量	発生消長の一例・防除時期の目安									防除上の注意事項等	
	9月						10月				
	1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	1半旬	2半旬	3半旬		
ホウレンソウ	べと病	← 定期防除 →									・発生すると感染スピードが速く、発生後の防除は困難であるので、予防防除に努める。 ・平均気温20℃を下回る9月中旬頃から、低温多湿の発病条件が重ならないよう管理する。
	発生量:並										
	コナダニ類	被害発生リスク									
トマト	発生量:並	← 定期防除 →									・餌となる有機物の多用は避ける。 ・もともと土壌にいるコナダニは湿った条件を好むので、乾燥するほ場では土壌からホウレンソウに移動しやすい。 ・土壌湿度を保つことで被害を軽減している例がある。
	灰色かび病	ハウスでの発生量 →									
	発生量:やや少	← 定期防除 →									
	疫病										
発生量:やや少										・発病した葉、果実は伝染源となるため早めに除去する。 ・保温のためのサイド被覆前に発生抑制を徹底する。 ・サイド被覆後は連続して閉め切った状態にせず、乾燥させる時間を設ける。 ・低温・連続降雨の前に予防防除する。 ・台風で泥の跳ねあがりがあると発病リスクが高くなる。 ・20℃飽和湿度条件では6時間で感染する。 ・密閉した状態では急激な蔓延がみられることがある。	

*** トマトキバガの防除法について ***

本虫は卵から成虫になるまでの期間が約1か月と短く、産卵数は260個と多いため増殖力が強いので、大被害を受けることがあります。一方で世代交代は年間10~12世代の多化性であり、殺虫剤の抵抗性がつきやすく、海外ではすでに何種類もの殺虫剤の効果が低下していることが報告されています。国内での薬剤抵抗性はまだ報告されていませんが、農薬の使用方法によって農薬が効きにくい難防除害虫となることが解っています。本虫はトマト果実に穿孔侵入することから薬剤抵抗性が発達すると被害は甚大となります。

● 薬剤抵抗性を発達させない防除法

- IRAC (殺虫剤抵抗性対策委員会) は、薬剤抵抗性を発達させないよう、作用機構が異なる農薬により、ブロックローテーション防除する(一世代期間をひとつのブロックと考え、隣り合ったブロックでは同一の作用機構の農薬を使用しない)ことを推奨しています。
- ほ場に侵入させないため、0.8mm ネットの使用が推奨されていますが、飛騨地域では夏期の高温を助長するため現実的ではありません。しかし夏期以外での使用の検討が必要となるかもしれません。
- 越冬させることにより、薬剤抵抗性発達のリスクが大きく高まります。積雪地の戸外では越冬はできないと考えられますが、年中張りっぱなしのハウスでは越冬した事例があるので、定期防除等の対策が必要です。



フェロモントラップによるトマトキバガ誘殺数の推移(飛騨市古川町)

東海地方1か月予報(8/23~9/22) 名古屋地方气象台 8月21日発表

暖かい空気に覆われやすいため、気温の高い状態が続くでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。太平洋高気圧に覆われやすいため、降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

岐阜県病害虫防除所では、この他に病害虫の詳細な調査データをホームページにて公開しています。(トップページQRコード→)

<https://www.pref.gifu.lg.jp/page/2934.html>

飛騨支所 〒506-8688 高山市上岡本町 7-468

TEL (0577) 33-1111(内線 245) FAX (0577) 34-2706



トップページ